

平成27年6月15日(月)

老球の細道139号

一生を棒にふるような仕事をしたい

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今日は生まれて2回目の年金支給日である。教員時代の給料から比べると金額は少ないがもらえる日は嬉しい。教員時代も年々下がる給料額に憂いを感じていたが、給料日はやはり私にとっては「晴れの日」となった。その証拠に、事務室に給料明細書をもらいに行くと、事務長から「室井先生元気ですね！」と必ず声をかけられた。私としては、いつも元気だと思っていたのに、他人から見ればそうではなかった。無意識のうちにお金で一喜一憂する自分が恥ずかしかった。

教員になってから今まで、自戒のために身近においてある詩がある。

「先生になったとき 自分が真理に目をそむけて 子ども達に本当のことを語れるか
先生になったとき 自分が未来から目をそむけて 子ども達に明日のことを語れるか
先生になったとき 自分が理想を持たないで 子ども達にどんな夢を語れるか
先生になったとき 自分に誇りを持たないで 子ども達に胸をはれと言えるか
先生になったとき 自分がスクラムの外にいて 子ども達に仲良くしろと言えるか
先生になったとき 自分の闘いに目をそむけて 子ども達に勇気を出せと言えるか」

お金で一喜一憂しないために、後に新たに一行加えるようになった。

「先生になったとき 給料日にニヤニヤしていて 子ども達にお金より大切なものがあると言えるか」と。

ところで、かつて新聞を読んでいたら、度肝を抜くキャッチコピーが目に入った。

「一生を棒にふるような仕事をしたい。偉い人は皆そうだった」

このような仕事の報酬は「給料」や「収入」だけではおさまらないだろう。田坂広志著『仕事の報酬は何か』によると、お金より大切な目に見えない三つの報酬があるという。

第一が「能力を身につける喜び」。一生懸命に仕事をすると、職業人としての能力が身につく。良い仕事を残そうとする努力を通じて、職業人としての「能力」が磨かれる。そのことはまぎれもなく仕事の報酬。腕を磨く喜びをいつまでも求めて歩む。近道はない。秘訣はただひとつ。狭き門より入れ。

第二が「仕事を残す喜び」。一生懸命仕事をすると、良い仕事を残すことができる。職業人としての能力を磨くことによって、優れた「仕事」を残すことができる。それもまた、素晴らしい仕事の報酬。仕事を通じて創り上げるものは自分の芸術作品である。

第三が「人間として成長する喜び」。一生懸命に仕事をすると人間として成長できる。仕事の困難と悪戦苦闘し、仕事の仲間と切磋琢磨することによって、一人の人間として「成長」していくことができる。仕事が困難であればあるほど。それは最高の報酬である。

思うに、一生を棒にふる仕事とは、このような三つの報酬を求めて励むことだろう。高校時代に本当のバスケットボールと出会ってから一生をかける仕事を選択した。バスケットボールのコーチ。そしてそれを可能にする保健体育教員。あれから30数年たつ。もうやり直しのきかない年齢になってしまった。まさに一生を棒(ボール)に振ってしまったが、満足のいく棒の振り方か、そうでないかは残りの人生が答えを出してくれるだろう。

年金支給日に一喜一憂するのではなく、目に見えない三つの報酬を求め続けたい。